を、大宅村大宅寺

音羽山

〔顕注密勘云、相坂関は山城と近江との境なり。音羽山は関の西南の山つゞきたり。関より西は山階なり。瀧、河、里、和歌に詠ず〕

石山にまうでける時音羽山の紅葉を見てよめる

古今　秋風の吹にし日より音羽山嶺の梢も色づきにけり　貫之

夫木　なる神の音羽の瀧やまさるらん関のこなたの夕だちの空　中務親王

新後撰　瀧津瀬に落そふ水の音羽河せくかたもなき五月雨の頃　為氏

同　秋ふかくなりゆくまゝに衣うつ音羽の里や夜寒なるらん　頼泰

名寄　郭公いかできかまし音羽山ふもとの里にやどらざりせば　藤原成房

牛尾山

〔音羽山をいふ。法厳寺といふ観音堂あり、由縁前編に見へたり〕

堀川百首　嶺たかき牛の尾山にいる人は柴車にてくだるなりけり　修理大夫顕季

三井集　牛の尾や春のくるまにかつ消てまだらにみゆる峰の白雪

布引瀧〔牛尾山にあり、高三丈余、幅三間許、岩上に布を引がごとし〕

蛇ケ淵〔布引瀧より三十間許坂路の左にあり、巌間に方四間余の淵あり。又厨子奥村四手井氏の家に霊方の丸薬あり、様金屑丸といふ。むかし此淵に大蛇棲で人民を悩す事数しらず。彼四手井氏の先祖に伊賀守景綱といふ勇士あり、常に牛尾観音を信じ、延文三年三月七日参詣し、此淵を通りけるに、長なる大蛇出でゝ景綱を目がけ飛かゝる、景綱少しも臆する気色なく、剣をぬきづた〳〵に伐ほろぼし、安く退治してけり。此とき洛東清水寺の音羽瀧一日一夜血汐ながれ来りけるとなん。又かの大蛇の屍を川辺の芝生にて焼捨たり、今此所を焼芝といふ。景綱は我家にかへりて後、毒蛇の瘴気にあたり命も危ふく見へたる所に、香染の衣を着たる異僧忽然として来り給ひ、薬の霊方を与へ給ふ。即調合しこれを服薬すれば速に平癒し侍りぬ、是ひとへに牛尾観世音の応験なりとて、渇仰敬礼いやましけり。それより四手井氏の家に代々秘薬として伝り、其後永禄年中松永弾正弼久秀、此霊薬の功をためし見んとて極罪の者十人を出して大毒をあたへ、内八人に此薬を服しめ二人にはこれを用ず、かの八人の者は忽ち蘇生し二人は即死す、是より薬名の上に様の文字を冠らしめ、山科様金屑丸と号す、是その濫觴なり。今も厨子奥村四手井氏の支族に数代此くすりを製して世に弘むなり〕